

## 展覧会趣旨

今春、日本で開幕の万国博覧会（以下、万博）は、1851（嘉永4）年のロンドン万博が最初です。1862（文久2）年のロンドン万博では日本の品々が展示され、1867（慶応3）年のパリ万博には、日本から幕府、薩摩藩、佐賀藩が参加し、1973（明治6）年のウィーン万博にて、日本は公式参加を果たしました。

奇しくも同年、並河靖之（1845・弘化2年～1927・昭和2年）は、この地で七宝業を創業しました。靖之による「並河七宝」は、19世紀の万博を通じて世界に名を馳せ、多くの人々を京都の並河邸へと誘いました。

並河家は青蓮院門跡坊官を勤める家柄で、靖之は1855（安政2）年、数え11歳で並河家の養子となり、養父・靖全の急逝により家督を継ぎ、天台座主・青蓮院宮入道尊融親王（後の久邇宮朝彦親王）に仕えました。生家の高岡家（近江栗太郡六地蔵梅野木）は武家で、実父・九郎左衛門は武州川越城主松平大和守家臣・川越藩京都留守居役を勤めました。靖之は京都で生まれ育ち、安泰な人生を歩むはずでしたが、時代は幕末維新の激動期にあたり、先行きへの不安が絶えずあり、奉職の傍ら、当時、注目され始めた七宝業に飛び込みました。

日本の七宝業の系譜は近世初期に遡り、幕府お抱えの七宝師・平田道仁を祖とする一族が技法を相伝してきましたが、幕末の尾張藩で梶常吉が独学で技法を開発し、尾張七宝の産地が形成され、庶民による七宝業が胎動しました。近代七宝業は、維新後に京都や東京、神奈川、山梨、埼玉でも着手された新興産業でした。

靖之は1878（明治11）年に七宝を専業とし、次々と万博へ挑み、その都度、受賞を果たしました。殊に並河七宝の有線七宝技法は超絶を究め、高い技術力は世界を驚かせました。金属の器胎を素地とし、施す図柄の輪郭線（アウトライン）を金属線で模り、その中にガラス質の多彩な七宝釉薬の色を挿し、焼成、研磨して創りだされる並河七宝の耀きは、眩い光彩を放ち、高雅な雰囲気漂わせ、多くの人々を魅了しました。

春季特別展「並河七宝－万国博覧会の喝采」では、日本の万博黎明期に創業し、一代で偉業を成し得た靖之と並河七宝の軌跡の一端をご紹介します。「2025年日本国際博覧会」（略称：大阪・関西万博）開催の時に、明治維新後の混沌とする中で、新たな人生を拓く糧として、その術を七宝業に求め、世界に挑んだ靖之と職工たちの真心にふれていただけたら幸いです。

170余年におよぶ万博の歴史を顧みると、そこには私たち人間の歴史が映し出されていることが分かります。では、未来にて現代はどう映るのでしょうか。世界の安寧を希求し、命の輝きを尊重する、私たちの真心を未来に届けることができるよう、ともに励んでまいりましょう。

春から夏の季節、皆様の佳きひと時を、当館にてお過ごし下さい。

並河靖之七宝記念館